## 3.2.4 カルマンフィルタ (KF) の数学的導出

まずは予測ステップの導出から始める。1 ステップ前の信念  $bel(x_{t-1})$  に、制御  $u_t$  が加わったあとの信念  $\overline{bel}(x_t)$  が計算できる。

$$\overline{bel}(x_t) = \int p(x_t|x_{t-1}, u_t)bel(x_{t-1})dx_{t-1}$$
(1)

$$= \int \mathcal{N}(x_t; A_t x_{t-1} + B_t u_t, R_t) \mathcal{N}(x_{t-1}; \mu_{t-1}, \Sigma_{t-1}) dx_{t-1}$$
 (2)

ただし、 $\mathcal{N}(x;\mu,\Sigma)$  は平均  $\mu$ 、共分散行列  $\Sigma$  のガウス分布の x における確率密度を表す。具体的にガウス分布で表示すると

$$\overline{bel}(x_t) = \int \mathcal{N}(x_t; A_t x_{t-1} + B_t u_t, R_t) \mathcal{N}(x_{t-1}; \mu_{t-1}, \Sigma_{t-1}) dx_{t-1}$$

$$= \eta \int \exp\left[-\frac{1}{2} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))^T R_t^{-1} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))\right]$$

$$\exp\left[-\frac{1}{2} (x_{t-1} - \mu_{t-1})^T \Sigma^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1})\right] dx_{t-1}$$
(4)

指数関数の積は肩の和を取ればよい。なので以下のように関数  $L_t$  を使って書き換えられる。

$$\overline{bel}(x_t) = \eta \int \exp[-L_t] dx_{t-1}$$

$$L_t = \frac{1}{2} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))^T R_t^{-1} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))$$

$$+ \frac{1}{2} (x_{t-1} - \mu_{t-1})^T \Sigma^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1})$$
(6)

 $x_{t-1}$  に関する積分を実行するために、 $L_t$  を  $x_{t-1}$  によらない項のみを含む部分  $L_t(x_t)$  と、 $x_{t-1}$  による項も含む部分  $L_t(x_{t-1},x_t)$  に分解する( $L_t(x_{t-1},x_t)$  は  $x_{t-1}$  によらない項を含んでもよい、なので一意な分解ではない)。こうすると、この積分は

$$\overline{bel}(x_t) = \eta \exp[-L_t(x_t)] \int \exp[-L_t(x_{t-1}, x_t)] dx_{t-1}$$
(8)

とかける。この積分だが、 $L_t$  が  $x_{t-1}$  に関して 2 次式だったことを思い出すと、 $x_{t-1}$  に関して「平方完成」すればある  $x_{t-1}$  によらないベクトル  $\xi$  と行列  $\Psi$  を用いて、 $\frac{1}{2}(x_{t-1}-\xi)^T\Psi^{-1}(x_{t-1}-\xi)$  の形に変形できそうである。この形に変形できれば、 $\exp L_t(x_{t-1},x_t)$  の積分は多変量正規分布  $\mathcal{N}(x_{t-1};\xi,\Psi)$  の規格化定数を求める積分と全く同じになり、特に  $x_t$  によらない定数になる。

この変形を行うため、あえて  $L_t(x_{t-1},x_t)$  は  $x_{t-1}$  によらない項を含めても良いことにしている。  $\exp L_t(x_{t-1},x_t)$  の積分を多変量正規分布  $\mathcal{N}(x_{t-1};\xi,\Psi)$  の積分の形にもっていくために、この分布  $\exp L_t(x_{t-1},x_t)$  の頂点の座標  $\xi$  を求める。 頂点  $\xi$  では、  $L_t(x_{t-1},x_t)$  はベクトル  $x_{t-1}$  のあらゆる方向に対して微分係数が

0 になっている。なので、 $L_t(x_{t-1},x_t)$  を  $x_{t-1}$  の各成分に関して微分したもの(この操作を「 $L_t$  を  $x_{t-1}$  で微分」という)がすべて 0 となっている。

 $x_{t-1}$  の第i 成分を $x_{i,t-1}$  とし、実際にこの計算を実行すると

第一項と第二項は和に使われている添字が違うだけで、全く同じ項である。第三項、第四項についても同じである。結局

(共分散行列は対称なので添字を入れ替え、さらに A を転置。第四項も同様)

(14)

$$\frac{\partial L_t}{\partial x_{i,t-1}} = -A_{i\alpha}^T R_{\alpha\gamma,t}^{-1}(x_{\gamma,t} - (A_{\gamma\delta,t} x_{\delta,t-1} + B_{\gamma\delta,t} u_{\delta,t})) + \Sigma_{i\alpha}^{-1}(x_{\alpha,t-1} - \mu_{\alpha,t-1})$$
(15)

が得られるので、行列とベクトルの積を計算してまとめてかくと

$$\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}} = -A_t^T R_t^{-1} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t)) + \Sigma_{t-1}^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1})$$
(16)

 $L_t(x_{t-1},x_t)$  はベクトル  $x_{t-1}$  のあらゆる方向に対して微分係数が 0 になっている点  $x_{t-1}=\xi$  を求めた かったのだから、上の式がゼロベクトルと等しいとした方程式を $x_{t-1}$ に関して解けばよい。

実際に変形をはじめるまえにもうひとつ別の量を計算しておく。 $L_t(x_{t-1},x_t)=(x_{t-1}-\xi)^T\Psi^{-1}(x_{t-1}-\xi)$ の形に変形する際のあらたな共分散行列  $\Psi$  だ。 $L_t(x_{t-1},x_t)=rac{1}{2}(x_{t-1}-\xi)^T\Psi^{-1}(x_{t-1}-\xi)$  に変形できる ことを仮定すると、この行列は以下のように計算できる

$$\Psi_{ij}^{-1} = \frac{\partial^2 L_t(x_{t-1}, x_t)}{\partial x_{i,t-1} \partial x_{i,t-1}} = \frac{\partial^2 L_t}{\partial x_{i,t-1} \partial x_{i,t-1}}$$

$$\tag{17}$$

$$(L_t(x_t)$$
 は  $x_{t-1}$  で微分してもゼロ) (18)

$$(L_{t}(x_{t}) \, l \, t \, x_{t-1} \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, t \, \tilde{c} \, d \, h \, l \, h \,$$

$$= \frac{1}{2} \frac{\partial}{\partial x_{i,t-1}} \Psi_{j\alpha}^{-1} (x_{\alpha t-1} - \xi_{\alpha}) + \frac{1}{2} \frac{\partial}{\partial x_{i,t-1}} (x_{\alpha t-1} - \xi_{\alpha})^T \Psi_{\alpha j}^{-1}$$
 (20)

$$= \frac{1}{2}(\Psi_{ij}^{-1} + \Psi_{ji}^{-1}) \tag{21}$$

 $\Psi$  は定義から共分散行列で対称行列で、対称行列の逆行列はまた対称行列になる  $(1=(AA^{-1})^T=(A^{-1})^TA$ だから、 $A^{-1}=(A^{-1})^T)$  ので両辺は等しい。なので  $\Psi$  を求めるため、 $L_t$  をさらにもう一回微分する。

$$\frac{\partial^2 L_t}{\partial x_{t-1}^2} = \frac{\partial}{\partial x_{t-1}} - A_t^T R_t^{-1} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t)) + \Sigma_{t-1}^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1})$$
 (22)

$$= \frac{\partial}{\partial x_{t-1}} A^T R_t^{-1} A_t x_{t-1} + \frac{\partial}{\partial x_{t-1}} \Sigma_{t-1}^{-1} x_{t-1}$$
 (23)

$$= A^{T} R_{t}^{-1} A_{t} + \Sigma_{t-1}^{-1} = \Psi_{t}^{-1}$$
 (24)

それではいよいよ  $L_t(x_{t-1},x_t)$  の  $x_{t-1}$  についてあらゆる方向に対して微分係数が 0 になっている点  $x_{t-1} = \xi$  を求める。

$$\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}} = -A_t^T R_t^{-1} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t)) + \Sigma_{t-1}^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1}) = 0$$
(25)

$$-A_t^T R_t^{-1} x_t + A_t^T R_t^{-1} A_t x_{t-1} + A_t^T R_t^{-1} B_t u_t + \sum_{t-1}^{-1} x_{t-1} - \sum_{t-1}^{-1} \mu_{t-1} = 0$$
 (26)

$$(A_t^T R_t^{-1} A_t + \Sigma_{t-1}^{-1}) x_{t-1} = A_t^T R_t^{-1} x_t - A_t^T R_t^{-1} B_t u_t + \Sigma_{t-1}^{-1} \mu_{t-1}$$

$$(x_{t-1})$$
 に関する項を左辺にまとめた) (27)

$$\Psi_t x_{t-1}^{-1} x_{t-1} = A_t^T R_t^{-1} (x_t - B_t u_t) + \Sigma_{t-1}^{-1} \mu_{t-1}$$
 (Ψ の定義) (28)

$$x_{t-1} = \Psi_t [A_t^T R_t^{-1} (x_t - B_t u_t) + \Sigma_{t-1}^{-1} \mu_{t-1}]$$
(29)

これで無事、 $L_t(x_{t-1},x_t)$  としてほしい形が求まった。すなわち

$$L_t(x_{t-1}, x_t) \tag{30}$$

$$= \frac{1}{2}(x_{t-1} - \xi)^T \Psi_t^{-1}(x_{t-1} - \xi)$$

$$= \frac{1}{2}(x_{t-1} - \Psi_t[A_t^T R_t^{-1}(x_t - B_t u_t) + \Sigma_{t-1}^{-1} \mu_{t-1}])^T \Psi_t^{-1}$$
(31)

$$(x_{t-1} - \Psi_t[A_t^T R_t^{-1} (x_t - B_t u_t) + \Sigma_{t-1}^{-1} \mu_{t-1}])$$
(32)

である。実際ここで求めた  $L_t(x_{t-1},x_t)$  を使って  $L_t(x_t)=L_t-L_t(x_{t-1},x_t)$  が  $x_{t-1}$  を含まない形になっているか確認しておく。本書の通りこれには具体的に計算してみてもよいが、  $\frac{\partial}{\partial x_{t-1}}[L_t-L_t(x_{t-1},x_t)]$  が  $x_{t-1}$  に関して恒等的に 0 に等しいことを示す方法もある。

このノートでは  $\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}}$  と  $\frac{\partial L_t(x_{t-1},x_t)}{\partial x_{t-1}}$  が等しいことを示すことで、上記の事実を示す。  $\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}}$  は前に計算したので、 $\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}}$  を計算すればよい。

$$\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}} = \frac{\partial}{\partial x_{t-1}} \frac{1}{2} (x_{t-1} - \xi)^T \Psi_t^{-1} (x_{t-1} - \xi)$$
(33)

$$= \frac{1}{2} \frac{\partial x_{t-1}}{\partial x_{t-1}}^T \Psi_t^{-1}(x_{t-1} - \xi) + \frac{1}{2} (x_{t-1} - \xi)^T \Psi_t^{-1} \frac{\partial x_{t-1}}{\partial x_{t-1}}$$
(積の微分、ch0 のノート参照) (34)

$$= \Psi_t^{-1}(x_{t-1} - \xi) \quad (\Psi$$
は対称行列) (35)

= 
$$\Psi_t^{-1} x_{t-1} - \Psi_t^{-1} \Psi_t [A_t^T R_t^{-1} (x_t - B_t u_t) + \Sigma_{t-1}^{-1} \mu_{t-1}]$$
 (ξ の定義)

= 
$$(A^T R_t^{-1} A_t + \Sigma_{t-1}^{-1}) x_{t-1} - A_t^T R_t^{-1} (x_t - B_t u_t) - \Sigma_{t-1}^{-1} \mu_{t-1}$$
 (Ψ の定義)

$$= -A^{T} R_{t}^{-1} (x_{t} - (A_{t} x_{t-1} + B_{t} u_{t})) + \Sigma_{t-1}^{-1} (x_{t-1} - u_{t-1})$$

$$(38)$$

これは  $\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}}$  と等しいので、 $\frac{\partial}{\partial x_{t-1}}[L_t-L_t(x_{t-1},x_t)]$  は 0(定数関数) となる。よって  $L_t-L_t(x_{t-1},x_t)$  は  $x_{t-1}$  によらない。

これで無事に  $L_t$  を分解できた。信念の計算に戻ると  $\int \exp L_t(x_{t-1},x_t)dx_{t-1}$  を定数にとることができたので

$$\overline{bel}(x_t) = \eta \exp[-L_t(x_t)] \int \exp[-L_t(x_{t-1}, x_t)] dx_{t-1}$$
(39)

$$= \eta \exp[-L_t(x_t)] \tag{40}$$

と簡単に書き直せる。1 行目と2 行目で  $\eta$  を取り替えている。信念の計算には $L_t(x_t)$  が必要である。せっかくなので  $L_t$  を愚直に展開して  $L_t(x_{t-1},x_t)$  を引く以外の方法で計算してみる。

 $L_t(x_t)$  は  $x_{t-1}$  によらないので  $L_t-L_t(x_{t-1},x_t)$  はどの  $x_{t-1}$  で計算してもよい。なので  $x_{t-1}=\xi$  で計算すると、 $L_t(x_{t-1},x_t)=0$  なので、展開して差し引くまでもまく  $L_t(x_t)=L_t$  になる。つまり、 $L_t$  に $x_{t-1}=\xi$  を代入すればよい。

$$L_{t}(x_{t}) = \frac{1}{2}(x_{t} - (A_{t}\xi + B_{t}u_{t}))^{T}R_{t}^{-1}(x_{t} - (A_{t}\xi + B_{t}u_{t})) + \frac{1}{2}(\xi - \mu_{t-1})^{T}\Sigma_{t}^{-1}(\xi - \mu_{t-1})$$

$$(41)$$